［巻頭特集］鈴鹿が生んだ明治文壇の鬼才

斎藤緑雨の生涯と功績をたどる

辛らつな文芸批評や鋭い風刺に満ちた小説を書き、明治文壇の鬼才と呼ばれた斎藤緑雨。緑雨は現在の鈴鹿市神戸で幼少期を過ごしました。生家の一部を復元した緑雨亭がある龍光寺から、郷土が生んだ明治の文人の、短くも鮮烈な生涯をたどります。

樋口一葉を世に送り多くの文人と交流

斎藤緑雨は1868年、明治が始まった年に、伊勢国神戸（現在の鈴鹿市神戸）で神戸藩に仕えた医師、斎藤利光の長男として生まれました。本名は賢。一家は緑雨が9歳の時に上京します。

緑雨は少年の頃から俳諧を学び、明治法律学校（明治大学の前身）を経て、仮名垣魯文に師事。『今日新聞』など、さまざまな新聞で執筆し、1889年に正直正太夫の名で『小説八宗』を発表しました。以後、風刺が効いた評論やパロディー精神旺盛な小説を次々と著わし、文壇の鬼才として名を広めます。

尾崎紅葉や坪内逍遥など、多くの文人と交流を持った緑雨ですが、1896年に森鷗外主宰の雑誌『めさまし草』に、鷗外や幸田露伴とともに、作品合評『三人冗語』を掲載し、当時の批評界の権威として、多くの作品を辛らつに批判しました。一方で、樋口一葉の小説『たけくらべ』を絶賛。これを機に、一葉の名は一躍高まったと言われています。その後に樋口家を訪れて親交を深めるようになり、一葉は緑雨の印象などを日記に書いています。

同年、一葉は他界。緑雨は葬儀費用を負担し、さらに借金の後始末の世話までしています。翌1897年には『一葉全集』を校訂出版しました。

2年後、『萬朝報』の制作部に入り、同紙の記者だった社会主義者、幸徳秋水と交流するなど精力的に活動しますが、肺結核にかかって療養生活を余儀なくされます。1904年、緑雨は友人の馬場孤蝶に自身の死亡広告記事を託し、東京の本所横網町の自宅で病没します。

衣斐賢譲さん

緑雨について長年研究してきた。「辛らつさで知られる緑雨ですが、本当は内気で愛情あふれる人物なんです」

あだ名は「なきみそ」故郷・鈴鹿に残る足跡

「生家が寺の近くに残っていると知り、興味を持ったのです。調べ始めたら、著作や人物が面白くて」と、話すのは鈴鹿市神戸にある龍光寺の閑栖・衣斐賢譲さん。衣斐さんが緑雨の研究を始めたのは30年ほど前。「辛らつな批評で知られる緑雨ですが、子どもの頃は『なきみそ（泣きべそ）』とあだ名で呼ばれていたようです。また、出身地を連想させる作品はありませんが、『斎藤緑雨　病中日記』に『故郷ニ帰ルニハイツデモ帰レル　シカシコノ身ハ昔ニ還ラヌ』と、望郷の念を記していることも分かりました」

（左から）石垣佶さん、衣斐賢譲さん、宇喜多信弘さん。3人は同級生で、少年の頃からの友人。今も地域の文化振興に取り組む、頼もしい仲間

1994（平成6）年、生家の建物は老朽化によって取り壊されますが、一部は市の倉庫に保管されました。「その復元のめどがなかなか立たず、悔しかった」という衣斐さん。衣斐さんをはじめ、多くの市民の協力により、市から遺構を譲り受けたのです。

そして2006（平成18）年、生家の一部を復元した緑雨亭や寺子屋などが入った木造2階建ての複合施設が、龍光寺境内に完成しました。衣斐さんが理事長を務めるNPO法人SUZUKA文化塾「啐啄庵」が地域の文化振興に取り組んでいます。緑雨亭は2階の4畳半と8畳間の2部屋で、天井や柱の一部に遺構を活用。緑雨の書簡などが閲覧でき、著作もそろっています。

現代人にも響く警句から緑雨の気概を感じる

建物の1階には学童保育施設「神戸みらい塾」があります。現在の運営を担うのは、衣斐さんの同級生で、長年にわたる友人の宇喜多信弘さんと石垣佶さん。緑雨にまつわる法人の活動を、衣斐さんとともに支えてきました。

宇喜多さんは「緑雨の感性は素晴らしいですが、さすがに若い人には古典の部類でしょうし、長い著作はとっつきにくいかもしれませんね。それなら、緑雨のアフォリズムに触れてみるのも、いいかもしれません」と勧めます。アフォリズムとは、人生や社会の機微を、簡潔な表現で言い表した警句・格言。石垣さんが「『貧を誇るは、富を誇るよりもさらに陋し』なんて、考えると奥が深いですね」と続けます。龍光寺の境内には、「按ずるに筆は一本也、箸は二本也。衆寡敵せずと知るべし」という代表的な警句の石碑があります。筆一本で稼いでも、二本の箸（生活）は操れないという意味で、文筆家として生きていく厳しさをユーモラスに表現しながら、その気概も込められている一言です。

郷土が誇る地域の偉人、斎藤緑雨。龍光寺を訪ねて、文筆家の足跡や言葉に触れてみてはいかがでしょう。

まずは緑雨が残したアフォリズムを入り口に、緑雨の感性に触れてほしい

1

1.NPO法人SUZUKA文化塾「啐啄庵」が管理する施設は、1階が学童保育「神戸みらい塾」、2階が緑雨亭になっています

2.龍光寺境内にある石碑。緑雨の警句「按（あん）ずるに筆は一本也、箸は二本也。衆寡敵せずと知るべし」が刻まれています

3.2階の一角には緑雨の著作が並び、ゆっくり閲覧できます

4.緑雨亭の室内。緑雨の生家の遺構を活用し、4畳半と8畳間が復元されました

Profile

斎藤緑雨

慶応3年12月30日(1868年1月24日)〜明治37年4月13日(1904年)。伊勢・神戸生まれ。小説家、評論家。本名賢、別号江東みどり、正直正太夫など。評論『小説八宗』で注目され、辛らつな風刺に富む独自の作風を開いた。小説『油地獄』『かくれんぼ』、随筆集『青眼白頭』など

information

緑雨亭
TEL 059-384-1155

鈴鹿市神戸2-20-8
開館時間：13:30〜17:00
休館日：日曜・祝日
入館料：無料

緑雨亭の様子は表紙のフリモARでチェック！

フリモARアプリをダウンロード

App Storeからダウンロード　Google Playで手に入れよう　で「フリモAR」を検索

※AppleおよびAppleロゴは米国その他で登録されたApple Inc. の商標です。
App Store®はApp Inc. のサービスマークです
※Google Play および Google Play ロゴは Google Inc. の商標です

文／山口美咲　写真／伊藤麻里子　デザイン／Beanstalk 白石純也